

保育科音楽コースにおける表現活動

— 合唱の授業を通して —

佐藤 淳 一*

Musical Expression through Choral Music : The Music Course in the
Department of Early Childhood Education

Juniti Satou

20年以上に亘って保育科の音楽教育に携わってきたが、とりわけ音楽コースの合唱の授業では、歌いながらパフォーマンスをする展開を続けてきた。その19年の間には社会の様も変わり、また学生の考え方も変化して、取り上げた演目にも変化が起こってきた。そして学生自らが考え制作することによって、音楽的にも、それ以上に人間としての成長が毎年見られた。この4月から保育科を離れ表現文化学科に移り、また2010年度には保育科も四年制大学になり現在のような音楽コースは存続し得ない計画にあるので、今ここで、18回行ってきた卒業演奏会での音楽コースの歩みをまとめようと思った。そしてその歩みを振り返り、この授業を通して為し得たこと、または足りなかったことなどを検証して、そのことによって今後の本学に於いての音楽教育に資することが出来ればと思う。

キーワード：自発性、創造性、忍耐、チームワーク

I はじめに

1988年4月、本学短期大学部保育科に、それまでの幼稚園教諭免許状と保育士資格とも取得できる「保育コース」(定員100名)に加えて、取得できる資格は幼稚園教諭だけで、音楽的能力に秀でた保育者養成を目的とする「音楽コース」(定員50名)が開設された。両コース共「保育科」のコースにすぎないのだが、その内実は、新設の「音楽コース」は保育士資格を取得できず、その代わりかなりの科目数に上る「音楽専門科目」と「音楽教育に関する科目」を用意し、目的の達成に備えたのである。以来今年度を含め19年を経たが、このような音楽科目の充実したカリキュラムを備えたコースは全国でも珍しく、出色のコースとして常に定員を満たし、教育的成果を上げてきた。

しかし昨今の18歳人口の減少問題と、幼稚園教諭と保育士資格の両取得の要請の高まり、これまで以上の保育者の専門性への期待などから、短期大学での保育者養成の限界が指摘され、本学の保育科も2010年を目処に四年制大学へ移行されることになった。この過程の中では幼免だけの「音楽コース」が生き残る道は極めて少ないだろう。とはいえ、この19年間に積み重ねてきた音楽教育、芸術教育に関する実績は、その方法論と共に見るべきものがあると考えられる。それらについて多少なりともまとめておくことによって、「音楽コースの教育」を今後に生かす道が出来るかもしれないと思うのである。

*尚絅学院大学表現文化学科

元来本学保育科は、その開設時から音楽教育に力を入れてきた。その伝統を背景に1982年から保育科2年生の総出演による市民公開の「卒業演奏会」や「クリスマス音楽会」を恒例化してきた。いずれも2年生全員の古典を中心とした曲目による合唱とプロオーケストラの共演を中心的演目としている。これらの演奏会は「音楽Ⅱ」という音楽基礎技能の科目の発表を兼ねる。さて「卒業演奏会」の前半のステージは「音楽コース」に与えられてきた。音楽コースは18年間欠かさず、2年次科目の「合唱」を基礎に、この「卒演」の前半ステージを制作してきた。それは民俗芸能であったりミュージカルのハイライトであったり、オペラの場面であったりした。この数年は、クラシック・ポップス・童謡など多岐にわたる分野から、学生の思い出の曲を集め、編曲し楽器演奏を加え、歌い、踊り、演じるステージを成功させてきたのである。

この制作を一貫して指導してきて、達成できた教育的果実や不足していたことなどを検証するために、この18年間の歩みをまとめてみたい。これによって今後の四年制大学保育科の教育や、表現文化学科の音楽関係の教育に資することが出来ればと思う。

Ⅱ 音楽コース卒業演奏会演目

- | | |
|------------------------|--------------------------------|
| 1. 1990・2・21 (水) 第7回 | 53びきのネコ |
| 2. 1991・2・16 (土) 第8回 | 北越戯譜 |
| 3. 1992・2・19 (水) 第9回 | 孫抱き振舞 |
| 4. 1993・2・24 (水) 第10回 | オペラ「カルメン」より |
| 5. 1994・2・23 (水) 第11回 | オズの魔法使い |
| 6. 1995・2・23 (木) 第12回 | ディズニーファンタジーワールド |
| 7. 1996・1・21 (日) 第13回 | 「サウンド・オブ・ミュージック」より |
| 8. 1997・2・22 (土) 第14回 | 「メリー・ポピンズ」より |
| 9. 1998・2・25 (水) 第15回 | 「天使にラブソングを」より |
| 10. 1999・2・20 (土) 第16回 | Favorite music 宮崎駿映画音楽より |
| 11. 2000・2・11 (金) 第17回 | My Love Melodies ～The Beatles～ |
| 12. 2001・2・23 (金) 第18回 | CARPENTERS FOREVER |
| 13. 2002・2・26 (火) 第19回 | Memories ～20年の軌跡～ |
| 14. 2003・2・25 (火) 第20回 | ありがとう～出会った人たちへ～ |
| 15. 2004・2・15 (日) 第21回 | Starting Over ～それぞれの道へ～ |
| 16. 2005・2・25 (金) 第22回 | Sound Color 59 |
| 17. 2006・2・24 (金) 第23回 | Precious Time ～今、この時を～ |
| 18. 2007・2・22 (木) 第24回 | 新たな旅立ち62 -ありがとう、2Dの仲間たち |

Ⅲ 授業のねらい・目的

保育科の中に「幼免」だけの音楽コースができる以前、特別研究として「音楽コース」を置いていた。この「コース」はピークとして音楽を選択する「特別研究」を履修するものであった。40名程の学生が毎年一つの合唱組曲や、オペレッタに取り組み、年度末にはその成果を学内コンサートで発表していた。

この「音楽コース」の内容は現在の「音楽コース」のカリキュラムの中に生かされることに

なった。開設以来一貫して開講されてきた「合唱」は上記の特別研究「音楽」の活動が期待され、また保障される科目であった。

講義内容のねらいには、「合唱を通して、幅広い表現力を養うと共に、豊かな音楽性を培う」としている。最も古くからある音楽の形態である「合唱」は豊かな歴史を持ち、現在も世界中で人々に愛され豊かな音楽文化の一翼を担っている。合唱のもつ教育的効果はよく知られているところである。

音楽コースの「合唱」はこの18年間に、ねらいは変わらずともその内容は変化してきた。大雑把に括ってみると、初めのところでは、オペラやミュージカルそして伝統芸能など、一つの形になっている作品を取り上げ、後半はその時その時の学生の思い出の曲をオムニバス形式で集めてステージ構成をしている。傾向が似通ってくるときもあるが、毎回学生自らが話し合い、一人ひとりが納得して一つのステージ作品を作り上げるようにしてきた。自分の考えを人前できちんと述べること、自分とは違った意見に集約されても、決まったことには従って物事を進めること、集団の中で自分の役割を自分で見つけることなど、音楽以外のことでもねらいをもって進めてきた。これも18年間では様々に変化してきている。これらのことについても後述したい。

IV 授業の進め方

年間のおおよその流れを記しておきたいと思う。

- 4月 ①自分たちのクラス全員で何が出来るのか全くのゼロから話し合う。
②話し合いの素材のために過去のビデオをみる。
③教師の側からすると、このクラスがどの程度声が出るのか、どの程度の合唱が出来るのかを見極めるために、簡単な合唱曲を歌わせる。
- 5月 ①話し合いをしながらテーマを決め、選曲に入る。
②役割分担も決める。(演出・振り付け・衣装・大道具・小道具・照明)
全員が必ずどこかを担当する。
- 6月 ①楽譜の準備をする。基本としては女声合唱になっているもの。クラス内にアレンジのできる者がいれば大いにチャレンジしてもらおう。
②準備の出来た楽譜から練習を開始する。
- 7月 ①全体の構成を考え、できれば台本を作成する。
②引き続き準備できた曲を練習する。
- 8～9月 ①編曲の必要なものを含めて揃っていない楽譜を準備する。
- 10月 ①幼稚園実習明けでもあるので、まず思い出し練習。
②7月までの話し合いの内容をもう一度確認する。場合によっては内容を修正するが、全員が同じラインに立って進めていけるようにさせる。
- 11月 ①曲の暗譜を始める。
②振り付けも開始する。
- 12月 ①繰り返し練習。
②照明プラン・衣装プラン話し合い。
- 1月 ①下旬に強化合宿。体に馴染むまで繰り返し練習する。
②演出と振り付けとで打ち合わせ。場合によっては台本や曲目などに大幅修正が入

ることがある。

- 2月 ①通し練習が主となる。
 ②衣装の準備。購入の場合はサイズを確認して発注。自分たちで制作の場合は型紙を準備し、布地も自分たちで購入し制作する。
 ③一年生の係りと打ち合わせをする。
- 本番前日 衣装・照明も入り舞台での通し練習。
- 本番当日 ①総練習（GP）。ここ数年は保育コース2年生にGPを見てもらっている。
 ②本番

V 分類

この18年の演目は、大きく3つのグループに分けることが出来ると思う。

1. 一つの作品のハイライト（第7回～第15回）

記念すべき音楽コース第1期生の選曲は、井上ひさし原作で馬場のぼるが絵本にした「13びきのねこ」。クラスの学生数が53名だったので「53びきのねこ」となった。

ちょうどその年の3月に、仙台市青年文化センターがオープン。その柿落としの公演の一つに加えてもらい、再演のチャンスを得た。続く北越戯譜と孫抱き振舞は、日本の伝統芸能である。北越は新潟県に伝わる民謡を素材としたシアターピース。孫抱きは岩手県花巻地方に伝わる伝統行事である。どちらも、クラスの代表者が現地に赴き取材をし、それを元に練習を重ねた。その次からは、オペラやミュージカルの名曲が続く。「カルメン」にはオリジナルでの女声合唱があり、また音楽も有名で、学生たちもどこかで耳にしたことのある曲が多く、いい選曲であったと思う。

2. 一人のアーティストの作品集（第16回～第18回）

オペラやミュージカルよりも学生達にとってより身近なアニメに焦点が当たった。その結果、第16回は宮崎駿の映画音楽でまとめた。その流れを踏襲してビートルズ、カーペンターズと続く。

3. 様々な作品オムニバス（第19回～第24回）

オペラ・ミュージカル～一人のアーティストと続いたが、同じ方向でオリジナル性を求めて選曲するには、学生達の発想に一つの限界が来たようである。その結果一つの作品・アーティストに拘るのではなく、自分たちにとって思い出となる様々な曲を出し合っ、一つのステージを作る方向に決定した。このやり方が現在も続いているが、やはり何年かそのパターンが続くと問題点も出てくる。毎回同じ曲がノミネートされてくる。それは主に中学・高校で歌ったことのある曲か、保育の勉強の中で歌った曲などである。

VI 詳しい内容

1. 53びきのねこ

馬場のぼるの絵本「13びきのねこ」を基に創作音楽劇に挑戦した。青島広志作曲の同名の合唱曲を使用。楽譜は授業担当者が準備。全体の振り付けは、バレエをやっている学生が中心となり担当した。

2. 北越戯譜

新潟県堀之内町に伝わる盆踊唄を中心に、あそびうた・わらべうたを組み合わせながら、即興的に舞台上で作り上げていくシアターピース。柴田南雄採譜の楽譜を使用。授業担当者は、

一年間の海外研修のため前期のみ授業に関わる。夏休みには現地まで出かけ堀之内郷土芸能振興会の方々から取材してくる。指揮は学生が行った。初演のひばり児童合唱団にもご協力をいただいた。

3. 孫抱き振舞

岩手県花巻市に伝わる伝統行事である。前年度演目の印象もあり日本の伝統芸能になった。保育科元教授鶴間順子先生の紹介によりこの企画が実現した。学生数名と教員とで花巻へ取材に行く。地元の方々に話を聞き、踊りとお囃子を実際に習い、またその様子をビデオに収め、繰り返し練習をした。普通は自宅で行う「お振舞い」を、市民会館のステージという広い舞台で壮大に再現された。卒業演奏会プログラムによると、「私たちがこの演目を選んだきっかけとなったのは、この行事が子供や女性が主役となっているということで、保育科の学生に適していると思ったから」と書かれている。

4. オペラ「カルメン」より

カルメンの中には、オリジナルが女声合唱である曲が何曲かある。授業担当者が、アレンジを加えずに出来、なおかつ聞き栄えのする曲ということで学生に紹介した。電子オルガン担当の佐藤博幸先生にアレンジを依頼し、初めてエレクトーンを使用。また山台のけこみ部分を石畳風にしたり、家の背景を作るなど、本格的に大道具を制作した。外部の人に初めて演出を依頼した年でもあった。バレエの先生に踊りの振り付けも依頼した。エレクトーンによってオーケストラの音色が再現され、音楽全体の幅が広がった。

5. オズの魔法使い

前年のオペラつながりでミュージカルを選曲する。正直なところこの年は大成功とはいえなかった。学生達は例年と同じように一生懸命練習に取り組んだが、幼稚園の学芸会の様に全員が出演するというので、主役のドロシーはじめ主要なキャストが場面ごとに交代することになった。衣装も三人分作り、それを交替しながら着て、場面ごとに人物が代わった。また場面転換が多く、それぞれの場面より舞台転換の時間の方が長くなってしまい、話がうまく繋がらなくなってしまった。

6. ディズニーファンタジーワールド

前年の反省から、できるだけ場面転換に時間を取らないように選曲から考えることになった。青島広志編曲の同名の合唱譜を使用。ミッキーとミニーを進行役に立て、ピンマイクを使う。この年も演出と振り付けは外部の方に依頼した。ポピンズ先生役のソリストとして専門の声楽家渡部ジュディスさんに歌ってもらった。マスゲームのような動きをこの時初めて取り入れた。衣装は全員が同じデザインの物を手作りした。

7. 「サウンド・オブ・ミュージック」より

この年は初めからミュージカルを念頭に置いて選曲をした。合唱のアレンジがあまり簡単すぎると仕上がりが具合も良くないのだが、出版されている楽譜を中心に検討した結果、北野実編曲によるサウンド・オブ・ミュージックの女声合唱版を使用することになった。ほとんどの曲が有名なので、演奏する側も聞き手も十分満足できるプログラムであった。練習が佳境に入った頃、学生同士での諍いが表面化した。練習に出席し一生懸命頑張っている学生と、さぼり気味の学生との諍いである。両者と授業担当で話し合いを持ち、互いが納得しあった。この年からは予算上のこともあり、外部の演出者等は依頼せず、すべて自分たちで制作した。

8. 「メリー・ポピンズ」より

前年度の流れを踏襲することとなった。ミュージカルを中心に、且つ女声合唱版として出版されている曲から検討した。サウンド・オブ・ミュージックからジュリー・アンドリュース繋がりでメリー・ポピンズになった。この年も制作・演出全てが学生のオリジナルである。2年前のデイズニー以降、合唱しながら全員で一つのフォーメーションを組んで動くことが中心となった。

9. 「天使にラブソングを」より

「天使にラブソングを」Ⅰ・Ⅱの映画をミックスした形で、学生たちがオリジナルの台本を作成した。ハイル・ホーリー・クイーンやオー・ハッピー・デーが流行した頃である。ゴスペルをメインにプログラムを考えたが、学内でのクリスマス礼拝の聖歌隊で歌った讃美歌と、映画の中で歌われた曲を組み合わせて、台本と共に独自の作品が出来上がった。

10. Favorite music 宮崎駿映画音楽より

前年までの、一つの作品を中心にステージを構成することよりも、様々な作品から歌いたい曲を選ぶことになった。その結果、その当時「もののけ姫」もヒットし、また「トトロ」など学生たちの思い出に残っている宮崎駿のアニメ映画で使用された曲の中から、特に気に入った歌を集めて演奏することに決定した。タイトルが上記のようになった所以である。

11. My Love Melodies～The Beatles～

この年は一人のアーティストに焦点を当てて選曲することになった。話し合いの中でビートルズの話になり、偶然授業担当者が手に入れたビートルズのメドレー集を学生に紹介し、その楽譜を使用することに決まった。プロの女声合唱団のためにアレンジされたもので音楽が大変しっかりしており、練習過程から充実した時間を送ることのできた作品であった。学生の中に三味線を弾く者がおり、ミッシェルという曲では洋楽器と和楽器のコラボレーションが実現した。

12. CARPENTERS FOREVER

宮崎駿→ビートルズと続き、学生にとって有名で且つ心を打つアーティストはカーペンターズであった。テーマは早めに決定したが、選曲には少々時間がかかった。市販されている楽譜も複数あり、カーペンターズのどの曲をどのヴァージョンで演奏するかは時間を費やした。CDを何度も聞き、選曲ならびに曲順を決定した。ミスターポストマンでは舞台上を本物の郵便自転車が走った。

13. Memorise～20年の軌跡～

この年からは、一つのテーマでまとめるのではなく、自分たち一人ひとりにとって思い出となる曲を出し合い、その中から選曲するというオムニバス形式になった。前の年に流行った曲、もう少し遡って流行った曲、ドラマの主題歌だった曲などから10曲を選んだ。二つの曲をドッキングさせたり弦楽器をプラスしたりと工夫を凝らした。

14. ありがとう～出会った人たちへ～

卒業演奏会も20回目を迎え、また学生たちも20歳を迎える年に当たり、今まで20年間お世話になった方々への感謝を込めて選曲することとなった。保育科合唱コンクールで歌った曲や、その年の特別伝道礼拝に来てくださったアーティストから楽譜をいただいたりと、その時でないとは出来なかった曲もいくつか入った。

15. Starting Over ～それぞれの道へ～

このクラスが一年次の合唱コンクールで優勝した時の自由曲「瑠璃色の地球」がまず決まった。この年は例年以上に多彩な能力の持ち主が揃った学年でもあった。初見で何でも弾きこなす学生、声楽家のようによく声の通る学生、そして何よりもチームワークの良さが音楽的な面からも成果を発揮した。「友達になるために」は手話を取り入れて歌った初めての曲となった。

16. Sound Color 59

ここ数年のプログラムは、ポップス系の、それも似たような曲が選曲されてきた。そこで少し目先を変えて、クラシック系の曲で合唱が出来ないだろうか検討に入った。その年ちょうど、平原綾香の歌う Jupiter が流行り、そこにベートーベンの第九を基にした Joyful Joyful が加わり選曲が膨らんでいった。Jupiter の管楽器アンサンブルは、この学年の学生の持つ力を十分にアピールできた。

17. Precious Time — 今、この時を —

オムニバス形式での選曲の仕方は、その学年によって様々であった。この年はクラスの中で仲のいいグループが8つほどあり、それぞれが1曲ずつ選曲するという方法を取った。そしてその曲を選んだ人たちがその曲の指導に当たった。ポンキッキーズ21で放送されたライندگانは一つの目玉となった。踊りあり手話あり学生による編曲ありと、一人ひとりの持つ様々な能力が遺憾なく発揮された。

18. 新たな旅立ち62 — ありがとう、2Dの仲間たち —

毎年のことだが、音楽コースの学生達は個性豊かな人物が多く、意見の衝突も多く見られる。この学年もなかなか意見がまとまらなかった。まずは合唱コンクールで優勝した時の「天使と羊飼いが決定。それからかなり時間をかけながら曲の相談をしていった。基本的には前年同様それぞれのグループから曲を出し合った。1月末の合宿からお互いの心が一つになり、それから本番までは飛躍的に向上し大成功を取めた。

VII. 演奏プログラム

1. 創作劇 53びきのねこ (学生数53名) 1990.2.21 (水)

- 1) にゃあごろソング
- 2) おなかのへるうた
- 3) お腹が空いたのブルース
- 4) 53びきのネコが旅に出た
- 5) 雲においつけ
- 6) 上を向いて歩こう
- 7) オーケストラソング
- 8) 踊る子猫
- 9) なのだソング
- 10) ノラネコ暮らしの是非についての問答歌
- 11) 魚の子守唄
- 12) 動物づくしによる 体をきたえようソング
- 13) ネコの大漁唄い込み
- 14) ノラネコ天国ソング
- 15) 虹の彼方に～Over the Rainbow～

2. シアターピース 北越戯譜 (学生数53名) 1991.2.16 (土)

- 1) オープニング サントコ太鼓

- 2) あそびうた
 - お手玉 羽根つき (ひとよ ふたよ みわたしやよめご……)
 - あそびうた (ひふみよ いつものあねさんが……)
 - まりつきうた (もんだやアもんだやア 一っちょめのもんだやア……)
 - お手玉うた (おひとつおろしておさらい……)
 - ふうせんつきうた (わたした うけとったもっともだいじなむすめの子……)
- 3) 行事、催事にうたう伝統の歌とわらべうた
 - もっくらもち (もっくらもちゃどこいった……)
 - わら鉄砲 (とうかやのわらでっぼう……)
 - 鳥追いうた (とりおいだ とりおいだ……)
 - 正月さまのうた (しょうがつはどこまで……)
- 4) 大の阪
3. シアターピース 孫抱き振舞 (学生数56名) 1992.2.19 (水)
 - 口上に始まり、踊りに笛太鼓の入った一連のお祝い儀式である。
4. オペラ「カルメン」より (学生数62名) 1993.2.24 (水)
 - 1) 子どもたちの合唱
 - 2) たばこ女工の合唱
 - 3) ハバネラ
 - 4) けんかの合唱ジプシーの歌
 - 5) 行進曲と合唱
5. ミュージカル「オズの魔法使い」
 - 1) マンチキン国のうた
 - 2) オズの国へ
 - 3) かかしのうた
 - 4) プリキのうた
 - 5) ライオンのうた
 - 6) エメラルドの都のうた
 - 7) HOLD ON!
 - 8) 旅のうた
 - 9) Over the Rainbow
6. 「ディズニー・ファンタジーワールド」 (学生数53名) 1995.2.23 (木)
 - 1) Mickey Mouse March
 - 2) It's A Small World
 - 3) ハイホー、ハイホー
 - 4) いつの日にか王子様が
 - 5) A Spoonful of Sugar
 - 6) おおかみなんかこわくない
 - 7) A Whole New World
 - 8) ラ・ラ・ルー
 - 9) Beauty and the Beast (Duet)
 - 10) 星に願いを
7. サウンド・オブ・ミュージックより (学生数54名) 1996.1.21 (日)
 - 1) サウンド・オブ・ミュージック
 - 2) 朝の讃美歌～ハレルヤ
 - 3) 私のお気に入り
 - 4) ドレミの歌
 - 5) エーデルワイス
 - 6) ひとりぼっちの山羊使い (ヨーデルソング)
 - 7) さようなら、ごきげんよう
 - 8) すべての山に登れ
8. 「メリー・ポピンズ」より (学生数54名) 1997.2.22 (土)
 - 1) 古い鎖をたち切って
 - 2) 理想の乳母さん
 - 3) お砂糖ひとさじで

- 4) スーパーカリフラジリスティックエクスピアリドーシャス
 - 5) 眠らないで
 - 6) 楽しい休日
 - 7) チム・チム・チェリー
 - 8) 踊ろう調子よく
 - 9) 2ペンスを鳩に
9. 「天使にラブ・ソングを…」より — St. Francis high schoolの天使たち —
(学生数64名) 1998.2.25 (水)
- 1) いつくしみ深き (讃美歌312番)
 - 2) MY GUY (MY GOD)
 - 3) HAIL HOLY QUEEN
 - 4) I WILL FOLLOW HIM 'CHARIOT' オリジナルバージョン
 - 5) 主よ、われらを祝し (讃美歌259番)
 - 6) O HAPPY DAY
 - 7) こころに主イエスを (讃美歌228番)
 - 8) HAIL HOLY QUEEN
10. Favorite music ～宮崎駿 映画音楽より～
(学生数55名) 1999.2.20 (土)
- 1) ナウシカ・レクイエム
 - 2) 君をのせて
 - 3) ねこバス
 - 4) となりのトトロ
 - 5) 風のとおり道
 - 6) すすわたり
 - 7) ルージュの伝言
 - 8) めぐる季節
 - 9) カントリーロード
11. My Love Melodies ～The Beatles～
(学生数47名) 2000.2.11 (金)
- 1) Yesterday
 - 2) Here, There And Everywhere
 - 3) Yellow Submarine
 - 4) Hey Jude
 - 5) The Long And Winding Road
 - 6) Ob-La-Di, Ob-La-Da
 - 7) Michelle
 - 8) Let it Be
12. CARPENTERS FOREVER (学生数48名) 2001.2.23 (金)
- 1) I Need To Be In Love
 - 2) Please Mr. Postman
 - 3) Sing
 - 4) (The Long To Be) Close To You
 - 5) Top Of The World
 - 6) Yesterday Once More
 - 7) Only Yesterday
 - 8) Rainy Days And Mondays
13. 「Memories～20年の軌跡～」 (学生数62名) 2002.2.26 (火)
- 1) 桜の時
 - 2) PIECES OF A DREAM
 - 3) SEASONS
 - 4) 君がいるだけで
 - 5) 負けないで
 - 6) 渚にまつわるエトセトラ
 - 7) 晴れたらいいね

- 8) 明日があるさ
- 9) あの素晴らしい愛をもう一度
- 10) 恋に落ちて
- 11) 瑠璃色の地球
14. ありがとう ～ 出会った人たちへ ～ (学生数64名) 2003.2.25 (火)
 - 1) AMAZING GRACE
 - 2) HAPPY BIRTHDAY
 - 3) Oh! Happy Day
 - 4) Best Friend
 - 5) 終わりなき旅
 - 6) Power to the people
 - 7) 小さな恋の歌
 - 8) Hail Holy Queen
 - 9) 言葉にできない
 - 10) Joyful, Joyful
15. Starting Over ～ それぞれの道へ ～
(学生数56名) 2004.2.15 (日)
 - 1) ふるさと
 - 2) 明日への扉
 - 3) 空も飛べるはず
 - 4) I wish
 - 5) さくら
 - 6) ディズニーメドレー
 - 7) 勇気100%
 - 8) 思い出がいっぱい
 - 9) 友達になるために
 - 10) 瑠璃色の地球
16. Sound Color 59 (学生数59名) 2005.2.25 (金)
 - 1) よろこびの歌 - Joyful Joyful -
 - 2) カントリーロード
 - 3) Best Friend
 - 4) BELIEVE
 - 5) キミはともだち
 - 6) Jupiter
 - 7) 童神 - ヤマトグチ -
 - 8) 青葉の歌
17. Precious Time ～ 今、この時を ～
(学生数56名) 2006.2.24 (金)
 - 1) ヘイル・ホーリー・クイーン
 - 2) ホール・ニュー・ワールド
 - 3) ラインダンス
 - 4) 元気を出して
 - 5) きみとぼくのラララ
 - 6) みんなともだち
 - 7) ここにしか咲かない花
 - 8) POP STAR
 - 9) We are the world
18. 新たな旅立ち62 — ありがとう、2Dの仲間たち —
(学生数62名) 2007.2.22 (木)
 - 1) 晴れたらいいね
 - 2) 天使と羊飼
 - 3) 3月9日
 - 4) Performance!!!
 - 5) BELIEVE

- 6) Hail Holy Queen「天使にラブ・ソングを…」より
- 7) 友だちになるために
- 8) 栄光の架橋

VIII. 音楽コースのカリキュラム

音楽コースとしての特色を出すために、音楽大学のカリキュラムにより近い科目を設定した。この科目は音楽コース開設以来一貫して開講されている。

授業科目		1年次	2年次	備考	
基礎技能	音楽ⅠA	①			
	音楽ⅠB	1			
	音楽Ⅱ		②		
音	専科実技	声楽Ⅰ	<2>	同科目Ⅰ・Ⅱを 4単位選択必修	
		声楽Ⅱ			<2>
		器楽Ⅰ	<2>		
		器楽Ⅱ			<2>
		作曲Ⅰ	<2>		
		作曲Ⅱ			<2>
	副科実技	声楽Ⅰ	1		同科目Ⅰ・Ⅱを 2単位選択
		声楽Ⅱ		1	
		器楽Ⅰ	1		
		器楽Ⅱ		1	
		作曲Ⅰ	1		
		作曲Ⅱ		1	
楽	ソルフェージュ	<2>			
	合唱		<2>		
	オーケストラⅠ	2			
	オーケストラⅡ		2		
	音楽理論Ⅰ	<2>			
	音楽理論Ⅱ		2		
	音楽の民俗と現代		*1		
	楽曲分析と解釈		*1		
	音楽史		*2		

○ …… 卒業必修単位 <> …… コース必修単位 * …… 開講せず

IX. 考察

18年間にわたる「合唱」の授業を通して、良かった点・改善すべき点をここで考察しておきたい。

A. 良かった点

- 1) 普段の学生の集団の中ではあまり見えない一人ひとりの潜在能力が見えたこと、一人ひとりの確実な成長を見られたことが大きい。クラス集団としてのパフォーマンスのために各自、各グループの役割分担が必要となり、演出や振り付けなどの面で毎回新たな発見があった。
- 2) テーマや選曲は、授業担当者も提案する一方で、自分たちが話し合い、歌いたい曲を出し合ったので、その年その年のオリジナリティがあった。
- 3) 「合唱」の授業なので合唱曲が中心であったが、音楽コースの学生として、各自の得意分野の楽器演奏も取り入れることができ、音楽の幅が広がった。
- 4) 話し合いの時間を多く持ち、各自の意見を公の場で明らかにさせるようにした。練習を進めるに当たっては、全員が同じ情報を共有できるように毎回確認をしながら先に進める努力をした。そのことによって一人ひとりの意識を啓発できた。
- 5) 授業担当者は必要な事以外ではできるだけ介入しないようにして、学生自身の自発的な

アプローチを待った。させられるのではなく、自分がそうしたいと思って行動できるように動機付けをした。

B. 反省点

- 1) 音楽がしっかりしていないと舞台全体が貧弱になる。メロディが単純すぎたりテキストがつまらなかつたりすると、演奏者にも観客にも欲求不満が残った時があった。
- 2) 話し合いは授業時間を使って行うので、時間中声を出さずに終わってしまう事があった。
- 3) ステージへのイメージがなかなか湧かず、役割分担をしようにもなかなか進まないとき、担当者としてうまく説明しきれない事があった。
- 4) 4・5・6月頃は、学生は演奏会自体へのイメージも希薄で、話し合いの内容も何をどう話し合ったらいいのか迷ったまま時間を費やした。
- 5) ここ数年のプログラムは、自分たちの思い出の曲を中心に組まれてきたが、ほぼ毎年同じ曲が重なった。これは彼女等が中学高校時代に歌ってきた曲が時代を問わずに一緒に、ほとんどの生徒にとって心に残っている曲は共通している。新たな発想でプログラムを拓げていくことができなかった。

X. まとめ

初めの頃は全てが手探りで、学生と話し合いを重ねながら、共同で作り上げた感がある。私自身が徐々に運営の仕方が分かり慣れてくると、話し合いも学生だけに任せ、必要などころだけ口を出せば順調に進むことがわかってきた。ここ数年、学生の気質も変化してか、少々レールを敷いてやらないとなかなか前進しない印象を持った。練習に出席しない学生への対応は年々変化してきている。「サウンド・オブ・ミュージック」の時には、練習出席について学生同士でのトラブルが表面化し、私も入って三者で話し合いを持った。練習があるにもかかわらず、学生食堂で目が合っただけでその学生たちは逃げ帰ったというのがきっかけだったが、その話し合いでお互いの気持ちを分かり合い、一緒に舞台を作ることでまとまっていった。それ以降、学生同士の大きなトラブルのようなものは表面では見られなくなった。よく言えば互いが尊重しあい相手を理解しようとするあまり、自分が我慢してしまうように見えた。別の言い方をすれば、言われたことは良くやるが、言われなくなかなか動けない学生が増えてきている。しかし、その状況に業を煮やして手を出してしまう事をひたすら我慢して待つと、いよいよやらねばならなくなってきた時は、今も昔も変わらずに学生のもつ潜在能力が芽を出してくる。そのような瞬間に出会った時、その年の成功の確信を持つことが出来た。

今の時代は、様々な面で便利になり、効率がよくスピーディな事が良しとされがちだが、この授業では全く逆のやり方を取ってきたと思う。全員が一箇所に集まり、司会者を中心に何をどうするのか話し合い、進めていくうちに不備があればまた話し合い、とにかく鼻を突き合わせる時間をたくさん作った。そのことによって、現在の進捗状況をみんなで確認することが出来、他人事あるいは、させられているという感覚は払拭できたのである。

他のほとんどの授業が、授業担当者の提案するシラバスにそった授業で、どちらかといえば学生は受身にならざるを得ない授業形態だと思うが、この「合唱」では、自分たちで一から始め、やりたい事を作り上げてゆける数少ない授業であると思われる。それだけに、やりたい放題では目的から逸脱するので、どこまでは自由にさせ、どこで軌道を修正するか、その判断が難しいところである。